

【音楽の友 11月号コンサート・レビュー】

◆ みつなかオペラ《カプレーティとモンテッキ》

兵庫県川西市が運営するみつなかホールの例年の定期公演。3年間続けられたドニゼッティのシリーズが終わり、今回からベッリーニ・シリーズのスタート。いわゆる「ロメオとジュリエット」の物語。テーマ性を明確に打ち出した公演だ。原作通り、ロメオ役はメゾンプラノ（橘知加子）だが、ロマーニの台本のまじさのせいもあって、終幕の盛り上げに、ややモノ足りない面はあるが、それを上回るベルカントの魅力がたっぷり味わえて成功。同じく主役のジュリエッタ（木澤佐江子）をはじめ、カペッリオ（松森治）、テバルド（小林峻）らが、いずれも立派な声で、ベッリーニにはうってつけ。牧村邦彦指揮のザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団もまた、まさにポイントを心得た好演だった。加えて、毎回感心するのはマストロ口マッティ（ミフノ）の簡潔な装置だ。この背景には井原広樹（演出）との親密な関係があるのではないか。来年の第23回《清教徒》が楽しみ。（9月28日・川西市みつなかホール）

◆
〈日下部吉彦〉